

# 命令文と動詞の語彙アスペクト

出水 孝典

## 1. はじめに

本稿では現代英語における命令文 (imperative) を取り上げ、動詞の語彙アスペクトの点から、どのような動詞が命令文として生起可能なのかを検討する。

周知のように、命令文は日常会話において、命令・指示・忠告などを行う目的で用いられる。次例は映画のノベライゼーションからのものであるが、会話の直接引用部 (direct quote) の中で命令文が用いられている。これらの場合、下線によって示された伝達動詞が、命令文の果たす目的を示していることにも注意されたい。

- (1) a. “Tony,” Paulie ordered one of his men, “*get to the door. Watch the street.*” (R. Tine, *Eraser*: 6) (ポーリーは手下の一人に命令した。「トニー、玄関へ行け。外を見張るんだ」)
- b. “Dial 911,” he instructed Dexter. “*Tell them you want a police car up here fast—or somebody’s gonna die.*” (D. Chiel, *Die Hard with a Vengeance*: 32) (「911に電話しろ」と彼はデクスターに指示した。「はやくパトカーをよこせと言うんだ。さもないと死人が出そうだってな」)
- c. “He’s drugged out or something. *Stay away,*” Zeus advised the young man, who warily backed away. (D. Chiel, *Die Hard with a Vengeance*: 36) (「そいつはヤク中か何かだ。近づかんほうがいいぞ」とゼウスがその若い男に忠告すると、男はおそろおそろ後ずさった)

命令文の使用は何も会話に限られたことではない。本学のビジネス英語のクラスで使用しているテキストにも、次のように命令文に関する項目が見られる。

- (2) The imperative has the same form as the infinitive without to. It is used:
- to give orders or instructions, for example on packaging, labels or documents.  
*Fill in the form in block capitals.*  
*Empty the contents into boiling water.*
  - to give strong advice.  
*Avoid showing the soles of your feet in the Middle East.*

(*New Insights into Business*: 49)

強い忠告としての使用は、上で見た例と同様、会話におけるものであるが、それ以外に包装・ラ

ベル・書類などで指示を表すために用いられるということがここでは記述されている。

さて、このように英語に広く見られる命令文であるが、そうであるからといって、どのような動詞でも命令文として使用可能だというわけではない。例えば、次のような命令文は容認されないものである。

- (3) a. \*Know the answer!  
 b. \*Be tall! (Lakoff 1966: 4-5)
- (4) a. \*Recognize John! (Roberts 1986: 213)  
 b. \*Arrive at the station!

このように命令文で生起できる動詞とできない動詞が存在するのはなぜだろうか。これまでも様々な角度からこの問題は論じられてきたが、本稿の目的はこれを、Vendler をもって嚆矢とする動詞（より正確に言うと動詞句）の語彙アスペクトの点から説明することである。

本稿の構成は以下のようなものである。まず 2 節で、Vendler (1967) の動詞分類を Smith (1997) による解釈と図式化を通して導入する。続く 3 節では、命令文と Vendler の動詞分類の関係についての先行研究を見てゆく。4 節では、確実に命令文として生起可能な動詞グループである Activity と Accomplishment の時間図式に見られる共通性を指摘した上で、Achievement が例外的に命令文で生起している場合に、どのような説明が可能であることを示す。さらに 5 節では State が例外的に命令文で生起している場合を検討する。最後の 6 節はまとめである。

## 2 . Vendler の動詞分類

言語の様々な品詞のなかで、動詞というのはある時間内に生じている事象を表す。そして、動詞の表す事象がどのような時間的性質をもち、ある時間内でどのような広がりをもつのかは、動詞ごとに異なる。このような各動詞に内在する時間的性質（これを動詞の語彙アスペクトと呼ぶ）は、昔から哲学の分野において議論の対象となっており、こうした観念の萌芽は、遙か昔時のアリストテレスにまで遡って見ることができる。しかしながら、こうした問題が英語学・言語学で広く論じられるようになったのは、Vendler (1967) によって 4 つの動詞分類が提唱されてからのことである。

言語哲学者の Vendler は、英語の動詞をその時間的性質の共通性によって 4 つのグループへと分類した。Vendler 自身の論考の中ではいくぶん茫漠としたところのあったこの分類は、後に Dowty (1979) , Smith (1997) をはじめとする様々な言語学者によって精緻化され今に至っている。4 つのグループを若干の例とともに示すと次のようになる（さらに詳細な動詞の例については Vendler (1967: 107-108) , Dowty (1979: 54, 66-71) , Smith (1997: 23-35) などを参照）。

- (5) a. *States (Statives)*: know, believe, have, desire, love, own  
 b. *Activities*: run, walk, swim, push a cart, stroll, laugh, enjoy, think about, eat cherries  
 c. *Accomplishments*: paint a picture, make a chair, deliver a sermon, draw a circle, build a house, destroy a house, write a letter, read a letter, eat a cherry  
 d. *Achievements*: recognize, spot, find, lose, reach, die, win a race, leave

これが、動詞の語彙的な意味・性質のうち時間的な部分(動詞の語彙アспект)を扱う際に今日よく用いられる、Vendlerの動詞分類と呼ばれるものである。

各グループの動詞は、それぞれある時間的性質を共有している。(5a)のStateは過程や変化をもたない均質な状態を表す。それ以外の(5b)-(5d)は何らかの過程や変化を含む。具体的に言うと、(5b)のActivityは決まった終結点をもたない何らかの過程を表し、(5c)のAccomplishmentはある過程がありその結果何らかの状態が成立することを表し、さらに(5d)のAchievementは何らかの結果状態が成立することのみを過程に言及することなく表現する。そして、これらのグループ間の時間的性質に関して、その共通点と差異を捉えるために、Smith(1997)は[Static],[Telic],[Durative]という3つの時間素性(temporal feature)を用いている。それによって彼女はVendlerの動詞分類を次のように整理している。

(6) Temporal features of the situation types

Situations	Static	Durative	Telic
States	[ + ]	[ + ]	[ - ]
Activity	[ - ]	[ + ]	[ - ]
Accomplishment	[ - ]	[ + ]	[ + ]
Achievement	[ - ]	[ - ]	[ + ]

(Smith 1997: 20)

ここで、Smithによる各時間素性の定義を通覧しておこう。初めに[Static]であるが、これは動詞の静的・動的という区別を表すもので、Statesは過程や変化をもたない均質な状態を表すので静的(static)、それ以外のグループはすべて何らかの過程や変化を表すので動的(dynamic)であるということである。

(7) States are static, events are dynamic. States are the simplest situation type. They consist of a single, undifferentiated period. [...] Events are dynamic; they are “continually subject to a new input of energy,” as Comrie puts it. [...] Events take place in time. They consist of successive stages which occur at different moments, and thus have the ‘stage property’.

(Smith 1997: 19)

ここでは、動的ということが「継続的なエネルギーの投入」「(変化の)段階」という2つの概念によって説明されている。次に[Telic]であるが、これはその動詞の意味が何らかの結果(outcome)・状態変化(change of state)を伴う場合は完結的(telic)、そうでない場合は非完結的(atelic)であるというものである。

(8) [Telic / Atelic]: Events may be telic or atelic. Telic events have a change of state which constitutes the outcome, or goal, of the event. When the goal is reached, a change of state occurs and the event is complete. [...] In contrast, atelic events are simply processes. They can stop at any time: there is no outcome.

(Smith 1997: 19)

最後の[Durative]は、その動詞の意味が時間的に見て持続的(durative)であるか瞬時的(instantaneous)であるかに関する素性である。

(9) [Durative / Instantaneous]: Situations are durative or instantaneous.

(Smith 1997: 19)

これらを用いてSmithはそれぞれの動詞分類を次のように定義している。

- (10) a. Activities are processes that involve physical or mental activity, and consist entirely in the process. They have the temporal features [ Dynamic ] [ Atelic ] [ Durative ]  
( Smith 1997 : 23 )
- b. Accomplishments consist of a process and an outcome, or change of state. The change is the completion of the process ; Accomplishments are finite, intrinsically bounded. They have the temporal features [ Dynamic ] [ Telic ] [ Durative ]  
( Smith 1997 : 26 )
- c. Achievements are instantaneous events that result in a change of state. They have the properties Dynamic, Telic, Instantaneous.  
( Smith 1997 : 30 )
- d. States are stable situations which hold for a moment or an interval. They have the temporal features [ Static ] [ Durative ]  
( Smith 1997 : 32 )

さらに、Smith はそれぞれの動詞分類を時間軸上での次のような図式として表示している。

- (11) a. Temporal Schema of Activities: I.....F<sub>Arb</sub>  
 b. Temporal Schema of Accomplishments: I.....F<sub>Nat</sub>  
 c. Temporal Schema of Achievements: E<sub>R</sub>  
 d. Temporal Schema of States: ( I ) ( F )

( cf. Smith 1997 : 23, 26, 30, 32 )

ここで I は開始点 ( Initial endpoint )、F は終結点 ( Final endpoint ) を表す。F に付いている Arb は「任意の、不定の」( arbitrary )、Nat は「自然な」( Natural ) の略である。これらは、何らかの結果・状態変化を含む Accomplishment の場合、その結果・状態変化が達成されれば事象が自然に終結するので、語彙的に指定された (つまり語彙の意味の一部である) 自然な終結点 ( F<sub>Nat</sub> ) が存在するのに対して、そうでない Activity の場合、達成すべき結果・状態変化がないのでどこで終わってもよい、つまり任意の終結点 ( F<sub>Arb</sub> ) が存在する、ということを示すために用いられている<sup>1)</sup>。それから、E は事象 ( Event )、R は結果 ( Result ) を表し、Achievement が結果の成立のみを指していることを示している。最後に...と の違いであるが、...が継続的なエネルギーの投入と段階性を伴う過程を表しているのに対して、 は均質な状態を表している。

なお、こうしたグループ分けをこれまで動詞分類と呼んできた。しかし、多くの言語学者がすでに指摘していることだが、厳密に言うところした分類は動詞句に対して適用されるべきものである ( Vendler はこの点に言及せず漠然と分類を行っていたのみである )。これは (5b) の eat cherries と (5c) の eat a cherry を比較するとよく分かる。eat cherries とした場合、サクランボをいくつ食べたかは不明であり、どれだけ食べれば eat cherries という事象が終結するのが規定されていない。したがってこの事象は自然な終結点をもたない Activity である。一方、eat a cherry の場合、サクランボを一つ食べ終えた時点が事象の自然な終結点となり、サクランボが食べられるという過程の結果、それがなくなるという状態変化が生じるので、Accomplishment となる。eat という動詞のみではこのような区別はつかず、eat cherries, eat a cherry という動詞句全体を見て初めて、Activity, Accomplishment のいずれであるかが判明する。したがって本来は動詞句分類と呼ぶべきものであるが、本稿では繁雑となるのを避けるため、引き続き動詞分類と呼んでおくことにする。

さて、この Vendler の動詞分類は、動詞固有の時間的性質（動詞の語彙アスペクト）が関係する様々な言語現象を議論するのに援用されてきた。もちろん、命令文と動詞分類の関係についても、先行研究のいくつかですでに論じられてはいる。しかしながら、それらには瑕疵が散見され、互いの記述を比較すれば齟齬する部分もある。次節ではそれを概観する。

### 3. 先行研究<sup>2)</sup>

#### 3.1. Lakoff (1966)

命令文はこれまで、様々な研究者によって取り上げられてきたが、動詞の素性と命令文の関係に初めて言及し先鞭をつけたのは Lakoff (1966) である。Lakoff は状態的・非状態的という素性のある述語がもっているかどうか区別するために、いくつかの統語テストを提案した。統語テストというのは、特定の統語環境（例えば命令文、進行形など）で、ある語句が生起できるか否かによって、その語句がある素性をもっているかどうかを判別するものをいう。Lakoff は命令文や進行形で生起できる述語は非状態的、生起できない述語は状態的であるとして、述語を分類した。具体例に即して言うと、(12)は命令文で生起しているので非状態的、(13)は命令文では容認されないので状態的ということになる。

(12) Slice the salami. (Lakoff 1966: 1)

(13) \*Know the answer. (Lakoff 1966: 4)

Lakoff は Vendler の動詞分類にまったく言及していないが、Lakoff のいう状態的というのが State、非状態的というのがそれ以外の動詞グループに相当すると考えられる。Lakoff のこのような区別を、Vendler の動詞分類と対応付けたのが、次の Dowty (1979) である。

#### 3.2. Dowty (1979)

Dowty (1979: 55) は、Lakoff による一連の統語テストを踏襲しつつ、それを Vendler の動詞分類に適用している。ただし、命令文との関連で言えば、Dowty の考察には不備がある。Dowty は Lakoff の状態的・非状態的であるという素性の違いを、Vendler の動詞グループの State と Activity, Accomplishment の間に見られる対立として捉えており、Achievement に言及していない。

(14) The distinction between states and activities (or actually between states on the one hand and activities and accomplishments on the other) is familiar to the linguist as the distinction *stative* vs. *non-stative* drawn by Lakoff in his thesis [...] (*know* is a stative, *run* is an activity, and *build* is an accomplishment) (Dowty 1979: 55)

その結果、命令文の可否を示す用例として挙げられているのは、State, Activity, Accomplishment の動詞のみであり、Achievement が命令文で生起できるか否かについては何も述べられていない。

(15) Only non-statives can occur as imperatives:

a. \*Know the answer! (State)

b. Run! (Activity)

c. Build a house! (Accomplishment) (Dowty 1979: 55)

したがって、これをどう解決するかが課題となる。

### 3.3. Roberts(1986)

Roberts (1986: 212) は, Vendler の動詞分類を動作主性 (agentivity) という点から考察し, それぞれの動詞グループの主語にくる名詞が担う意味役割が異なることを指摘している。<sup>3)</sup> Roberts によると Activity, Accomplishment の主語が動作主 (Agent) であるのに対して, Achievement, State の主語は経験者 (Experiencer) が主題 (Theme) であるという。そして, 命令文で生起可能なのは動作主性をもつ動詞グループ (つまり主語が動作主である Activity と Accomplishment) のみであると, 次のようなデータを挙げている。

(16) a. Run! (Activity)

b. Build the house! (Accomplishment)

c. \*Believe the earth is flat! (State)

d. \*Recognize John! (Achievement) (Roberts 1986: 213)

Dowty では言及されていなかった Achievement であるが, Roberts によると命令文では生起できないと言うことである。しかし, 本当にそうなのかどうか, 他の研究も考慮に入れて吟味する必要がある。

### 3.4. Smith(1997)

Smith (1997: 40) でも Roberts 同様, 命令文を動作主 (agent) という概念と関連付け, 次のように述べている。

(17) Dynamic events may have agents, which are sources of energy and volition. States do not have agents, at least not directly. [...] Imperative sentences [...] require non-stative verb constellations.<sup>4)</sup> They are associated with agency because only an event that is controllable can be commanded.

(Smith 1997: 40)

つまり, 動作主によってコントロールされる事象でないといふことも命じることなどできないので, 命令文は動作主性と結び付いており, 非状態動詞を要求するというのが Smith の主張である。例として Smith が挙げているのは次の2つの文である。

(18) a. Wash your car! (Accomplishment)

b. \*Know Greek! (State) (Smith 1997: 40)

こうした Smith の所説はおおむね Roberts のものと一致している。しかし, Smith が Roberts と異なるのは動作主の捉え方である。Smith によると, 動作主が存在するのは動的 (dynamic) な事象で, 動作主が投入されるエネルギーの源になっているということである。さて, 上の(6)(7)(10)で見たように, Smith は State のみが静的で, Activity, Accomplishment, Achievement はみな動的であると考えている。(18)で挙げられているのは Accomplishment と State の例のみであるが, Activity と Achievement は dynamic であると定義されているので, 命令文で用いること

が可能なはずである。つまり, Smith に従うと Roberts の主張とは異なり, Achievement の命令文は可能であるということになる。Activity の命令文が可能であることは, すでに (15b) (16a) によって検証済みであるが, Achievement はどうなのだろうか。Smith は次のように記述しているのみで例証はしていないので, 彼女の議論にはあまり説得力がない。

(19) Achievements are Dynamic, and verb constellations of this type appear in imperatives.

(Smith 1997: 46)

さらに, Roberts が示しているような命令文で生起できない Achievement が存在する以上, (19) のように断言してしまうことにも問題がある。

### 3.5. まとめ

本節では命令文と Vendler の動詞分類の関係について言及した先行研究を取り上げ, 比較・検討した。Vendler によって提唱された4つの動詞グループのうち, State は命令文で用いることができないのに対して, Activity と Accomplishment は命令文として生起可能であることを確認した。Achievement の命令文に関しては見解の不一致が見られ, Roberts が不可能だとして容認されない例を挙げているのに対して, Smith は用いられるとしながらもそれを拳証してはいない。命令文で容認されない Achievement の例が存在する以上, Achievement は原則的には命令文で生起せず, ある条件が整った場合にのみ例外的に生起すると考えておくのが無難であるように思われる。以下では, こうした問題に関してさらにデータを挙げながら検討してみたい。

## 4. 命令文と動詞の時間図式

### 4.1. 命令文で生起する動詞の時間図式

前節で確認したように, Vendler の動詞分類のうち確実に命令文として生起可能であるのは Activity と Accomplishment であるが, これらに共通するのは一体何なのだろうか。それを確かめるために, Smith の挙げている時間図式のうち, Activity と Accomplishment のものを見直してみよう。

(20) a. Temporal Schema of Activities: I..... F<sub>Act</sub>

b. Temporal Schema of Accomplishments: I..... F<sub>Nat</sub> [=(11a)(11b)]

すると, 命令文として生起可能なこれらの動詞グループの時間図式に共通している要素は, I..... という部分であることが分かる。ここから逆に, ある動詞が命令文として生起するためには, その動詞の時間図式に I..... という部分が含まれていなければならないと仮定することができる。するとさらに, これらの動詞を命令文として用いた場合に命令・指示されるのは I..... という部分であると考えることが可能である。このような仮定が, 命令文の解釈を説明する際にどのように役立つのかを, 以下で具体例に照らし合わせて考察してみる。

ここで, 上の(1)(2)に含まれる命令文を再検討してみると分かることだが, Get to the door. (これは Achievement なので後に4.3.2. 節で議論する) を除けば, すべて Activity か Accomplishment である。これらを動詞グループの違いごとにまとめなおすと, 次のようになる。

- (21) Watch the street. / Stay away. / Avoid showing the soles of your feet in the Middle East. (Activity)
- (22) Dial 911. / Tell them you want a police car up here fast / Fill in the form in block capitals. / Empty the contents into boiling water. (Accomplishment)

これらの命令文が一体何を命令していると解釈されるのか熟考してみよう。

(21)の場合、解釈は単純である。Activity は決まった終結点をもたない単なる過程のみを表す。このような Activity の命令文の場合、命じられているのはその過程、すなわちその動詞が表している語彙の意味全体で、それぞれ「外を見張れ」「近づくな」「かかを見せないようにしろ」と命令していると考えられる。過程部分の終わりについている任意の終結点 ( $F_{\text{Arb}}$ ) は、語彙によって決まっているわけではなく、語彙の意味の一部ではないと考えられるので、カッコでくくっておく。これを(20)の時間図式に当てはめる形で表示すると、それぞれ次のようになる（枠で囲んだのが命じられている部分である）。

(21)

Watch the street.	I.....( $F_{\text{Arb}}$ )
Stay away.	過程[外を見張る]
Avoid showing the soles of your feet...	過程[近づかずにいる]
	過程[かかを見せないようにする]

問題は(22)の場合である。Accomplishment はこれまでも見てきたように、ある過程がありその結果何らかの状態が成立することを語彙の意味としてもつが、ある過程が起こったからといって必ず何らかの結果が成立するとは限らない。具体的に言うと、Accomplishment である dial は「プッシュボタンを押す」という過程によって「電話がつながる」という結果が生じることを表す動詞だが、プッシュボタンを押しても電話回線の不調等により、電話がつながらないことはありうる。同様に、動詞 tell は言葉を発することによって情報を伝えることを表すが、騒音等のために発した言葉が情報伝達の役割を果たさないかもしれない。つまり、Accomplishment の場合、過程部分 (I.....) は動作主によって確実にコントロールされるが、その過程が結果部分 ( $F_{\text{Nat}}$ ) に至るかどうかは、周囲の状況によって左右され、動作主によって完全にはコントロールされていないと考えられる。命令文によって命じられるのは、動作主によってコントロールされる事象であると(17)で Smith は述べていたが、そうだとすれば、Accomplishment の結果部分は命じられていないことになる。つまり、「911に電話しろ」と命令した場合、命じているのは「(911に電話がつながるように) 911のプッシュボタンを押せ」ということであり、「彼らに...と言うんだ」と命令した場合、「(彼らに...が伝わるように)...と言葉を発するんだ」と命じているわけである。まとめると、Accomplishment を命令文として用いた場合、結果の達成はもちろん意図されているものの、命令されるのは語彙の意味全体ではなく過程部分のみだということである。これを上と同様に図示すると次のようになる（命じられている部分を示す枠が、語彙の意味の一部を囲んでいることに注意されたい）。

(22)

	I.....	F <sub>Nat</sub>
Dial ...	過程[プッシュボタンを押す]	→ 結果[電話がつながる]
Tell them...	過程[...と言葉を発する]	→ 結果[彼らに...が伝わる]
Fill in the form...	過程[書類に記入する]	→ 結果[書類が*完成する]
Empty the contents...	過程[中身を出す]	→ 結果[中身が空になる]

命令文として用いた場合に命令・指示されるのが、(20)の時間図式のうち I..... という部分であると仮定すれば、(21) (22)の命令文の解釈の差異はこれによって明解な説明が可能である。(21)の Activity の命令文では語彙の意味全体が命じられているのに対して、(22)の Accomplishment の命令文では語彙の意味のうち過程部分のみが命じられているが、命じられているのがいずれも I..... の部分だと述べることで、他に余分な説明原理を導入することなしにこれらの違いを示すことができる。以下ではこれを踏まえて、Achievement の命令文について考察する。

#### 4.2. Achievement の予備段階

Achievement の命令文に関しては、Roberts が不可能だとして容認されない例 (\*Recognize John!) を挙げているのに対して、Smith は用いられるとしながらも例は挙げていないことを3節で見た。これに関して小説からの実例を挙げよう。

(23) “I have a private and personal message for you,” said Youngdahl crisply. “Let’s get out of this parking lot. Find some empty back street for us. I think it would be much wiser.” [ ... ] Razin slowed past the side streets, searching for one to his liking, found a dark, cobblestoned street barely lit and turned into it. (I. Wallace, *The Second Lady*: 294) (「あなたに内緒の個人的な伝言があるんだ」ヤングダールは歯切れよくいった。「この駐車場から出よう。どこかひと気のない裏通りを見つけてくれ。そのほうがずっと賢明だと思う」[ ... ] ラージンはゆっくりと横丁をいくつかとおりすぎて、気にいった脇道をさがし、ろくに街灯もついていない石だたみの暗い路地を見つけて、そこに入っていった)

これは密談を交わしている場面であるが、Achievement である find が命令文として用いられている。ここで Achievement の時間図式を見直しておこう。

(24) Temporal Schema of Achievements: E<sub>R</sub> [ = (11c) ]

(24)を見れば分かるように、Achievement の時間図式には、命令文によって命じられる I..... という部分が含まれていないので、そのままでは命令文で生起していることが説明できない。このような例を説明するために、以下では Smith が述べている Achievement の予備段階という概念を瞥見し、さらに内木場 (1999) による Achievement への予備段階の取り込みという案を導入する。

Smith (1997: 30) によると、多くの Achievement には普通、何らかの予備段階 (preliminary stage) が存在するという。例えば win a race 「競争に勝つ」という場合、そもそも走らなければ勝つことなどできないし、reach 「...に着く」の場合も目的地への接近が必要である。

(25) Many Achievements allow or require preliminary stages. They may be conventionally necessary, as in [ win a race ]: to win a running race one must run it. Again, [ reach the

top ]requires a preliminary approach.

(Smith 1997: 31)

この「走る」「目的地へ接近する」といった, Achievement そのものによって指し示されているのではないが, その Achievement の成立に必要な過程を, Smith は予備段階と呼んでいる。(23) の find の場合も同様に, 「裏通りを(さがして)見つける」という意味であるから, 「さがす」という予備段階が存在する(この予備段階は, 後続する地の文で下線を引いた search for によって言語化されていることから, その存在が明白である)。

このような予備段階は, 通常 Achievement の成立には必要であるものの, 概念上は Achievement と切り離されたものである。具体的に言うと find は「見つける」という事象であって, 「さがす」という look for, search for などの Activity によって言語化される事象とは本来別個の概念である。しかし, 場合によっては, この予備段階が Achievement に取り込まれることがある。例えば, 内木場(1999)の挙げている, while 節内に find が生じた次例を参照されたい。

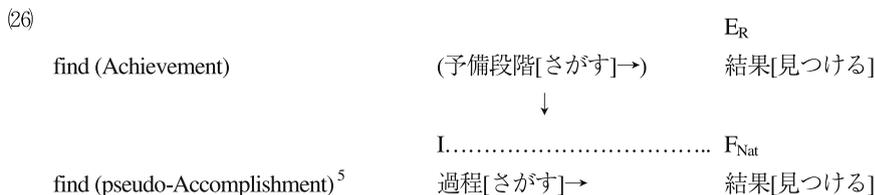
(26) There was the usual interminable wait *while they found Elizabeth.*

(J. Archer, *Shall We Tell the President?*, 内木場 1999: 78)

while 節内には通例, 持続的(durative)な事象である State, Activity, Accomplishment が生起する。しかしこの例では瞬時的(instantaneous)な Achievement である find が while 節内に見られる。これを説明するために内木場は, 予備段階の取り込みによるアスペクト拡大という考えを提唱している。

(27) この例の while 節では, エリザベスを最終的に見つけ出すまでの過程が焦点化されている。瞬間動詞の find は瞬時的状態変化を表し, [(26)] の例では予備段階(searching for Elizabeth)という行為が含まれている。この予備段階の探す行為(searching for)と, その最終段階の探しあてる行為(find)は連続しているが, それぞれ別種の行為であり, find だけが言語化されていることに注意されたい。while はこのように瞬時的行為に時間幅を持たせるように働き, 予備段階の行為を取り込むのである。while のこの働きを aspectual expansion (アスペクト拡大)と呼ぶことにしよう。(内木場 1999: 78)

これは結局, Achievement が, 本来の語彙の意味ではない予備段階を取り込んで, それを語彙の意味の一部である過程にすることで, ある種の擬似的な Accomplishment へと変化するということを表している。これは次のように図示できる。



本稿では内木場の響みに倣って, 命令文の場合も同様に, 予備段階の取り込みが行われていると想定する。4.1. 節で仮定したように, ある動詞が命令文として生起する場合, その動詞の時間図式に I..... という部分が含まれていなければならないとすれば, 命令文の場合にも while 節の場合と同様に, (26) のような操作が行われ, それによって find に取り込まれた予備段階が I..... という過程部分となり, それが命じられているのだと考えられるからである。これを(22)と同様に

図示すると、次のようになる。

(23)

find (pseudo-Accomplishment)

I..... 過程[さがす]→	F <sub>Nat</sub>
--------------------	------------------

結果[見つける]

ちなみにこの小説は、『替え玉』というタイトルで井上一夫氏による翻訳が出版されている。そこではこの命令文が「どこかひと気のない裏通りをさがしてくれ」と訳されているが、「どこかひと気のない裏通りを見つけてくれ」と訳した場合とほとんど伝達される意味内容にあまり差がないことは注目に値する。実は、英語でも look / search for と find を命令文で用いると、ほとんど同じことを命じることになる。この理由について少し考えてみよう。命令文以外で用いた場合、look / search for 「さがす」と find 「見つける」が別の概念を指し示すことは明白である。しかし、命令文で用いた場合、find は予備段階である「さがす」という部分（これは普通 look / search for として言語化される）を取り込んでその語彙的意味の一部である過程にし、さらにその過程のみが命令文で命じられることになり、実質的には look / search for を命令文で用いた場合と同じ部分が命じられていることになる。それゆえに、look / search for と find の命令文はほぼ同義なのである。look / search for の命令文を(21)<sup>1)</sup> 同様に図示した(28)を(23)<sup>1)</sup> と比較すると、このことがよく分かる（命じられている部分を示す枠内に含まれる要素がまったく同一であることに注目されたい）。

(28)

look/search for (Activity)

I..... 過程[さがす]	(F <sub>Att</sub> )
-------------------	---------------------

上のように Achievement の予備段階およびその取り込みという概念を用いると、なぜ Achievement が命令文で生起できるのかは分かった。Achievement が命令文で生起している場合、アспект拡大によって予備段階が取り込まれて過程部分を形成することで、本来の Achievement が擬似的な Accomplishment へと転換され、通常の Accomplishment の命令文と同じく、その過程部分のみが命じられているということである。しかし、Roberts の挙げた \*Recognize John! がなぜ言えないのかについては疑問が残る。これについては以下でさらに検討する。

#### 4.3. 命令文と Achievement

予備段階されれば、どのような Achievement でも命令文で生起可能なわけではない。Accomplishment へと転換された Achievement を命令文で用いた場合、命じられるのは取り込まれて過程部分となる予備段階であるので、予備段階の内容が Achievement の命令文の可否を決することになる。以下ではそれを考察する。

##### 4.3.1. recognize と find

Smith は、Roberts の挙げている recognize と(23)に見られる find の予備段階について、次のように詳記している。

(29) Other Achievements have preliminaries in some cases, but not others. For instance [I

recognize John ] may occur with preliminaries: I may meet John at a party and gradually find him familiar, eventually recognizing him as an acquaintance of years ago. But I may also recognize John instantly. Similarly, [ find your watch ] may occur after some preliminary searching stages, or without them. Although preliminaries of different types are related to Achievements, they are conceptually detached from the events.

( Smith 1997: 30 )

これによると, recognize と find は, 予備段階がある場合とない場合の両方があるということである。命令文で用いるためには, 命じられる過程部分として取り込むための予備段階が必要であるので, ここではそれぞれの予備段階を含む場合を見ていく。

Smith の挙げている recognize John が予備段階を含む場合というのは, 次のような状況である。

- (30) パーティーでジョンと出会い, 最初は誰だか分からなかったが, 話などしているうちにどこかで会ったことのある人物であると思い始め, そのうちに数年来の知り合いであるジョンだと分かる。

この場合の予備段階というのは「話などしているうちにどこかで会ったことのある人物であると思い始める」という部分である。一方, find your watch が予備段階を含む場合というのは, 「時計をあちこちさがし回ったあげくみつける」ということであるから, その予備段階は「時計をさがし回る」ということである。ここでこれらの予備段階について熟思すると, これらには動作主によるコントロールが可能かどうかの違いがあることが分かる。

命令文で用いられない recognize の予備段階は, 動作主の意志によってコントロールできないものである。目の前の人物をどこかで会ったことのある人物であると思うかどうかは, 人がやろうと思っただけでできるのではなく, その人の内面で自発的に生じる思考だからである。一方, 命令文で用いられる find の予備段階は, 動作主の意志によってコントロールされるものである。何かさがし回るといのは人がしようという意図をもって行うことに他ならないからである。

3.4. 節の(17)で Smith が述べていたように, 命令文によって命じられるのは, 動作主によってコントロールされる事象でなくてはならない。また, 4.2. 節ですで見たと同じように, Achievement を命令文で用いる場合, 命じられるのは取り込まれて過程部分となる予備段階である。これらを併せて考えると, 取り込まれる予備段階が動作主によってコントロールできる場合, その部分を命じることが可能なので命令文で生起できるが, そうでない場合, 命じられる部分が事象内に存在しないので, 命令文としては用いられないということになる。したがって, 予備段階が動作主によってコントロールできない recognize は命令文で生起せず, 動作主によってコントロールされる予備段階をもつ find は(23)のように命令文として用いられるということになる。

#### 4.3.2. arrive at と get to

Horrocks and Stavrou は, Smith のいう予備段階を伴う Achievement を pseudo-accomplishment と呼び, その例として arrive を挙げている。

- (31) There are, however, situations (e. g. 'arriving') regularly classified as achievements even though a processual prelude is not excluded [ ... ] Such situations are referred to here as pseudo-accomplishments, and these may be thought of as telic to the extent that a pro-

cessual transition to the critical moment of achievement is envisaged.

(Horrocks and Stavrou 2003: 302)

ここでは、到着へと至る過程の前兆 (processual prelude) が arrive から排除されないと述べられているが、これは Smith 流に言えば、arrive するためには到着へと至る予備段階が必要だということに他ならない。

さて、arrive の類義語であるとされる get to が命令文で用いられた例は、すでに冒頭で見た。

(32) “Tony,” Paulie ordered one of his men, “*get to* the door. Watch the street.” [≠ la]<sup>6)</sup>  
しかし、これを arrive at で言い替えることはできないと筆者のインフォーマントは言う。

(33) \*“(Tony,” Paulie ordered one of his men, “*arrive at* the door. Watch the street.”  
これはどう説明すべきなのだろうか。ここでも問題となるのは予備段階の内容である。これに関して、『ジーニアス英和大辞典』に見られる arrive の記述を見てみよう。

(34) 人・乗物などが〔ある場所に〕(自然に)着く、到着する、来る [at, in, on, upon, × to]  
(leave, depart)《「努力して着く」は通例 get to, reach》

これは最初に la として挙げられている語義であるが、ここから arrive が「(自然に)着く」ことを表すのに対して、get to は「努力して着く」ことを表すのが分かる。この記述は、これらの語の到着へと至る予備段階に質的な違いが存在することを意味している。以下で具体的に考察してみよう。

get to は「努力して着く」ことを表すので、その予備段階は、動作主の努力によってコントロールされていると考えられる。一方、arrive は「(自然に)着く」という意味なので、動作主の努力によってコントロールするのではなく、動作主のコントロールが及ばない周囲の状況に身を任せているうちに、目的地に到着したということを暗に示す。したがって arrive の予備段階は、動作主によってコントロールされていないということになる。上で見たように、Achievement が命令文で生起するためには、取り込まれて過程部分となる予備段階が動作主によってコントロールできるものでなくてはならない。そのために、動作主によってコントロールされる予備段階をもつ get to が(32)のように命令文として用いられるのに対して、予備段階に動作主のコントロールが及ばない arrive は命令文で生起しないということである。

#### 4.4. まとめ

本節では、動詞の時間図式と命令文の関係について考察し、命令文で生起する動詞は、その時間図式内に I …… という部分を含む Activity か Accomplishment でなければならないことを示した。それを踏まえた上で Achievement の命令文を検討し、命令文で例外的に Achievement が用いられている場合、その予備段階が取り込まれて過程部分となることによって、擬似的な Accomplishment へと変容しているということを述べた。Accomplishment を命令文で用いた場合、命じられるのはその結果部分ではなく結果へと至る過程の部分であった。Achievement から転換された Accomplishment の場合、まさに取り込まれた予備段階がこの過程部分に相当する。したがって、命じられる過程部分として取り込まれる予備段階が、動作主によってコントロールできない Achievement の場合、そもそもコントロールできないことを命じるのは無理なので、命令文で用いることが不可能であるということも示した。

## 5. 命令文と State

1-3節では、State を命令文では用いられない動詞グループとして扱ってきた。ただし、これは原則的なもので、すでに以前よりいくつかの文献で指摘されているが、例外的に State が命令文で生起することがある。

- (35) a. Be careful. (Lakoff 1966: 1)  
 b. Be a good girl! (Ljung 1975: 134)

以下での課題はこうした命令文を4節までの枠組みでどのように説明するかである。というのも、次に再掲する State の時間図式も、Achievement のものと同様、命令文で命じられる過程部分 (I.....) を含んでいないからである。

- (36) Temporal Schema of States: (I) (F) [≠ 11d]

(35)のように命令文で用いられる State が存在する以上、何らかの仕組みによって(36)の時間図式が転換され、最終的に I..... で表される過程部分を含む形状になるはずである。以下ではそれについて考えてゆきたい。

## 5.1. Sag and Pollard (1991)

時間図式の問題に入る前に、Sag and Pollard (1991) が be 動詞を用いた命令文に関して述べていることを見てみよう。Sag and Pollard は、命令文で用いられた be 動詞の表す状態が十分に動作主的 (agentive) でない、すなわち動作主によるコントロールが十分に可能でない場合は、十分に動作主的であるように解釈するよう努力すると主張している。Sag and Pollard に関して興味深いのは、(37)のデータに関して(38)のように述べていることである。

- (37) a. Be optimistic!  
 b. Be careful!  
 c. ?Be allowed to go!  
 d. ??\*Be tall!

- (38) If the VP of an imperative of sentence is not sufficiently agentive, we make every effort to make it so. Thus in examples like [(37)] the interpretation is crudely characterizable as 'make yourself  $\phi$ ', where  $\phi$  is the state expressed by the imperative VP.

(Sag and Pollard 1991: 83)

Sag and Pollard はこれらの時間的性質には言及していないので、4節まで展開してきた時間図式に基づく命令文の解釈メカニズムに、これらがどのように組み込まれるのかは定かではない。ただ、ここで注目すべきなのは、Sag and Pollard が Be  $\phi$  という命令文に対して行っている 'make yourself  $\phi$ ' というパラフレーズである。この make yourself  $\phi$  は、状態  $\phi$  への変化およびその予備段階を表すと解釈できないのだろうか。be 動詞のような State の、このような「ある状態への変化」という解釈は、これまでも論じられてきたことである。これについて以下で少し見てゆく。

### 5.2. State の起動相的解釈

State というのは常に状態を表すと考えられがちであるが、ある状態への変化を表すことがある。以下では、このような State の変化を表す解釈について概観する。Smith (1997: 182) は、State が Achievement へと転換される場合があることについて、次のように述べている。

- (39) Shifted Achievements with an inceptive interpretation occur with verb constellations that refer to states and Activities at the basic level of categorization, for instance *Mary was sick* (=Mary got sick) and Activities such as *Mary walked down the beach*. (=Mary started to walk down the beach)

(Smith 1997: 182)

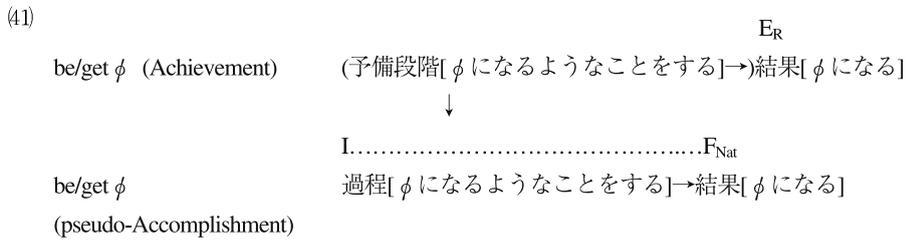
Smith は、*Mary was sick*. 「メアリーは病気であった」という State が、特定の環境において (この場合、単純過去形という時制), 「メアリーは病気になる」という Achievement として再解釈される場合があるとし、それを起動相的解釈 (inceptive interpretation) と呼んでいる。これは State の開始点である (I) に焦点を当てて他の部分を捨象することで、(I) のみが認識上存在するようにし、それを結果・状態変化を表す ER で置き換えるということである。図示すると次のようになる (ここでは「病気の」などの状態を  $\phi$  で表している)。

- (40) (I) ————— (F)  
 be $\phi$  (State) (開始点  $\phi$  になる] → 状態  $\phi$  である [ → 終結点  $\phi$  でなくなる ]  
 ↓  
 E<sub>R</sub>  
 be / get $\phi$  開始点 [  $\phi$  になる ] ( → 状態 [  $\phi$  である ] → 終結点 [  $\phi$  でなくなる ] )  
 (Achievement) (= 結果)

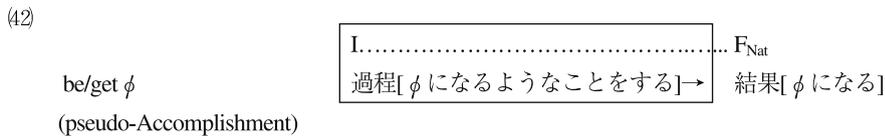
このような仕組みによって、本来は State であったものが、派生的に Achievement へと転換されることがあるために、State が状態だけでなく、状態変化をも表す場合があるということである。Be 動詞をはじめとする State が命令文で用いられた場合も、Sag and Pollard の 'make yourself  $\phi$ ' というパラフレーズを考えれば、まずこのような転換が行われて、状態変化を表す Achievement になっていると考えられる。

### 5.3. State へと至る予備段階と命令文

もともと State であっても、上に示したような仕組みで Achievement へと変換された動詞は、Achievement になっている以上、4.2. 節で提示したような仕組みによって、さらに予備段階を取り込んでその過程部分にすることで、Accomplishment になりうると考えられる。なお、ある状態変化への予備段階というのは、その状態になるようなことを何かするという過程である。これは以下のように図示できる。



このように初めは State であったものが、一連の仕組みによって Accomplishment にまで転換されると、取り込まれた予備段階によってその時間図式内に I..... という過程部分が存在するようになる。そして、この過程部分が動作主によってコントロールできれば、それを命じることも可能なため、命令文として生起することが可能であるということになる。命令文で生起した場合の解釈を、上の(21) (22) (23) (28)同様に、命じられる部分を枠で囲んで示せば、次のようになる。



State を命令文で用いた場合、命じられるのは「その状態になるようなことをする」という過程である。そしてこのような解釈は、(40) (41)という一連の仕組みによって State → Achievement → Accomplishment というように時間図式が変貌を重ねることで、時間図式内に命令文によって命じることのできる過程部分 (I.....) が生じると仮定すれば、余計な説明原理をさらに導入することなく示すことができる。Sag and Pollard の(38)の説明はまさにこれを逆から述べているだけで、Be  $\phi$  という命令文に対して彼らが提示している ‘make yourself  $\phi$ ’ というパラフレーズは、まさにこのような再解釈を示していると考えられる。make は Accomplishment であり、命令された人に対して状態変化への努力を命じているからである。以上で述べたことを(37)の例に即して、少し具体的に述べてみたい。

(37a) の be optimistic 「楽観的である」という State は、(40)の仕組みによって「楽観的になる」という Achievement に転換され、さらに(41)の仕組みを経て「楽観的であるようにする」という Accomplishment へと変わる。この Accomplishment は、「楽観的になるようなことをする」という過程部分（例えば「楽しいことを頭に思い浮かべる」「よいことばかりが将来起こるだろうと意識的に考える」といったことなどである）と、それによって生じる「楽観的になる」という結果部分から成り立っている。(37b) の be careful 「注意（深く）する」という State も同様で、「注意を払う」という過程とその結果として生じる「注意深くなる」という状態変化を表す。これらの過程部分はいずれも、動作主によってコントロール可能なものである。「(いやなことではなく)楽しいことを思い浮かべる」「(ぼーっとしているのではなく)注意を払う」というのは、動作主の意志によって選択、すなわちコントロールされていることだからである。そのためにこれらは命令文で生起しても容認される。命令文で生起した場合、(42)に従うと、これらの解釈はそれぞれ「(楽観的になるように)楽しいことを思い浮かべる」「(注意深いという状態になるように)注意を払え」という意味になる。命令文によって命じることができるのは動作主によってコントロールできる過程部分のみであり、結果として生じる状態変化へ至るかどうかは周囲の状況に左右されるからである。

(37a)(37b)とは対照的に,(37c)は容認度が低い。これは be allowed to go 「外出を許されている」という状態への変化に至る過程部分が、動作主によってコントロールされないからだと考えられる。動作主に対して外出を許可するのは動作主の上位者であり、その上位者の意向は動作主のコントロールの範囲外にあるためである。さらに,(37d)は昔から命令文として生起できない例として知られているが、確実に身長が高くなるようにするために動作主がコントロールして行うことのできる過程など存在しないので、当然その過程部分は動作主によってコントロールできないことになる。それがこの例の容認度が極めて低い理由であると考えられる。

#### 5.4. State の命令文の実例

以上で見てきたように、もとが State であっても、動作主によってコントロールできる予備段階を過程部分として取り込んだ Accomplishment へと転換されていれば、命令文で用いることが可能である。このような転換が典型的に見られるのは、知覚・認識を表す動詞である。語彙意味論者の代表である Rappaport Hovav と Levin は、このことを次のように記述している。

- (43) In fact, it is a widespread phenomenon that stative verbs have achievement interpretations. In English, this phenomenon is particularly well-documented for verbs of perception and cognition such as *see*, *know*, and *understand*.

(Rappaport Hovav and Levin 1998: 126)

彼女たちは Achievement に再解釈されることしか述べていないが、上で見てきたように、命令文で用いられている場合は、さらに Accomplishment まで転換されていると考えられる。次の例を考えてみよう。

- (44) a. The youngsters have a tendency to run wild, and I'm afraid--this is in no sense a criticism, please *understand*!--I'm afraid that their parents aren't the best of disciplinarians." (E. Queen, *The Tragedy of Y*: 115) (「この子供たちは、どうも乱暴をする傾向がありましてね 別にこれは非難ではありませんから、分かって下さいね あの親たちが、そもそも理想的な躾のできる人間ではないようですね」)
- b. "Listen to me, and no interruptions. And *believe* every word I tell you." (I. Wallace, *The Second Lady*: 286) (「横槍をいれずに聞いてくれ。それに、わたしのいうことは全部信じるんだ」)

(44a) の understand はもともとは「理解している」という意味を表す State である。それが「理解する」という意味の Achievement へと起動相的解釈によって転換され、さらに予備段階を過程部分として取り込んで「理解するようになることをして、その結果、理解する」という Accomplishment になっている。過程部分は「理解するようになることをする」、すなわち「理解しようとする(努力)する」「分かるようとする」ということだが、あることを理解しようとするか否かは、動作主が選択することなので、動作主によるコントロールが可能である。そのために命令文として生起し、過程部分を命じる「理解しようとする努力しろ」、つまり「分かって下さい」という意味で解釈されている。(44b) の believe も「信じている」という State から「信じる」という Achievement になり、最終的に「信じるようになることをして、その結果、信じる」という Accomplishment になっている。過程部分は「信じるようになることをする」、言い換えると

「信じようとする」だが、あることを信じようとするのかしないのかは、動作主の選択に任されている、つまり動作主によってコントロールされるので命令文として使用され、(44a) 同様に過程部分を命じる「信じるんだ」という解釈になっている<sup>7,8)</sup>

さて、(43) ではこのようなアスペクト転換を受ける動詞の例として know も挙げられているが、これまで見てきたように \*Know the answer! という命令文は一般に容認されないものである。その理由について少し考えてみたい。know はもちろん、本来は「知っている」という意味を表す State である。それが「知る」という意味の Achievement へと起動相的解釈によって転換されうることは、次のような文で生起していることを見れば明らかである。

- (45) “It was a covert operation in a preliminary stage. I don’t like to involve you in covert operations until I *know* for certain what the CIA will do.” (I. Wallace, *The Guest of Honor*, 出水 2001: 151) (「あれは予備段階にある秘密工作でした。CIA のとる行動を確実に知るまで、あなたを秘密工作に巻き込みたくなかったのです」)

この場合、「知らない」という状態から「知っている」という状態への変化が know によって表されているので、know は「知っている」という意味の State ではなく「知る」という意味の Achievement として解釈されている<sup>9)</sup>。問題となるのは、このように Achievement となった know に、それに至る過程部分として取り込める予備段階が存在するのか、存在するとすれば動作主によってコントロールできるものなのかどうか、ということである。これについて以下で少し考えてみよう。

何かを知るという場合、ひらめくようにして突然分かることもある。そうした場合、予備段階は存在しないと考えられる。その一方で、(45)のように、周囲の状況から様々な情報が入ることによって、次第に何かの全貌が明らかになることを叙述する場合もある。このような場合「次第に」と表現できることから分かるようにある種の段階が存在するので、まさに予備段階があるということになる。しかし、周囲の状況は動作主によって完全にコントロールされているものではないので、この予備段階は動作主のコントロールが及ばないものである。そのため、know が Accomplishment へとさらに転換される際に、この予備段階が過程部分として取り込まれたとしても、動作主によってコントロールされていない以上、命令文によって命じることはできない。このように、動作主によってコントロールされない予備段階しかもちえないという理由で、know は普通、命令文として生起できないのだと考えられる。

ただし、know を命令文で用いた次のような実例も存在する。

- (46) “Is that a threat?” “It is whatever you take it to be.” He busied himself lighting his cigar. “Yes, it is a threat. *Know* this we have the means to make you talk.” (I. Wallace, *The Second Lady*: 144) (「それ、脅しですか?」「どうとでも取るがいい」彼はせわしく葉巻に火をつけた。「そう、脅しだな。これだけは心得ておくんだな われわれにはあなたに口を割らせる手段がいろいろある」)

この場合、通常の命令というよりは、むしろ脅迫・威嚇を表しているので、動作主によってコントロールできない予備段階を命じているのではなく、コントロールするよう脅しているにすぎないと解釈することで、本来命令文によって命じられる部分に課される「動作主によってコントロールされていなければならない」という制約を回避することが可能かもしれない<sup>10)</sup>。

## 5.5. まとめ

本節では、例外的に State が命令文で生起している場合を俎上に載せた。そうした場合、State がまず起動相的解釈によって Achievement へと転換され、それがさらに予備段階を取り込んでその過程部分とすることで Accomplishment になっているという考えを提示した。さらに、もともと Achievement であるものが Accomplishment へと転換された場合と同じく、過程部分が動作主によってコントロール可能か否かによって、命令文として用いた場合に容認されるかどうかが決まることも示した。

## 6. おわりに

本稿では、どのような動詞が命令文で生起し、どのような動詞が命令文で生起できないかを、動詞の語彙アスペクトの点から説明することを試みた。そして、原則的には Activity と Accomplishment のみが命令文として生起可能であることを明らかにした。さらに、例外的に Achievement や State が命令文で用いられている場合は、動作主によるコントロールが可能な予備段階の取り込み・起動相的解釈といった仕組みによって、最終的に Accomplishment に転換されていると考えることで、うまく説明できることを提示した。

## 注

\* 本稿を作成するにあたり、草稿の段階でコメントを下された児玉徳美先生、海竇康臣氏、北村康晴氏、および英語の用例に関するインフォーマントとして筆者に協力して下さった Neil Heffernan 氏と J. Stewart Jones 氏に感謝いたします。また、筆者がこの問題に関心をもったのは、かつて児玉徳美教授の研究室で、執筆に際して助言を与えていた Yagyu (2002) によるところが大きいことも付記しておきます。もちろん、本稿における不備や誤りはすべて筆者の責任です。

- 1) 任意の終結点という概念に関しては少し説明を加える必要がある。Activity の run を例に取ってみよう。誰かが「永遠に走り続けている」ということは現実世界ではありえず、いくら走れば必ず「走るのをやめる」ということになる。いくら走って走るのをやめるかは、語の意味としてまったく指定されていないが、終わりは存在するという意味で任意 (arbitrary) であると表記されているわけである。これは現実世界では存在するが、語彙的意味の一部ではないので、時間図式上本来はカッコにでも入れておくべきものである。
- 2) 他の先行研究としては、Lee (1973) Ljung (1975) Davies (1986) Farkas (1988) などを参照。
- 3) ここでいう意味役割 (semantic role) というのは、主題役割 (thematic role) とも呼ばれ、名詞句や前置詞句として具現化されたものが、動詞によって表される事象のなかで担う意味的な役割のことをいう。それぞれの意味役割の定義やその数に関しては、いまだに意見が一致していない。
- 4) ここで Smith が verb constellation と呼んでいるのは、Vendler の動詞グループのいずれかを表す動詞 (句) と考えて差し支えない。
- 5) pseudo-accomplishment という名称は、後に触れる Horrocks and Stavrou (2003) によるものである。
- 6) 興味深いことに、arrive の命令文は「...までに」の意味を表す by 句を付けると容認度が上がる。
  - (i) a. \*Arrive at the station!
  - b. Arrive at the station by 11 o'clock!

これは状態動詞 know の命令文に見られるのと同様の現象である。

( ii ) a. \*Know the answer.

b. Know the answer by the next class. ( 柏野 1999: 113 )

したがって、Achievement と State の命令文には何らかの共通点があることが分かる。これが、5 節で提示したような、State がいったん Achievement になった上で、さらに Accomplishment へと転換されるという仕組みを考案した動機の一つである。しかし、どのような命令文にも by 句を付けられるわけではない。次のように Activity の命令文に付けると、容認度が低下する。

( iii ) a. Walk along the road!

b. \*Walk along the road by 11 o'clock!

本稿の4-5節のように、いずれの命令文も過程部分 ( I..... ) が命じられていると考えるだけでは、こういったことを説明することはできない。これをどのように説明してゆくかは、今後の課題とする。

7) 同じ believe を用いた ( 16c ) がなぜ容認されていないのかについては、今後さらに研究する必要がある。

8) このような believe の命令文が慣用句となった、believe me というフレーズがあり、次のように定義されている。

( iv ) believe me used to emphasize that something is definitely true: *No, it's too far to walk, believe me.*

( *Longman Advanced American Dictionary S. V. believe* )

これはあることが正しいことを強調するために用いられるフレーズであり、( iv ) の記述に含まれる用例を日本語に訳せば「いや、歩いていくには遠すぎる。本当にそうなんだよ」くらいになるだろう。

9) このような until 節内における動詞 ( 句 ) の解釈については、出水 ( 2001 ) を参照されたい。

10) このような命令文が、生起できる動詞の制約に関して、通常の命令文とどのように異なるかについては、今後さらに研究を進めてゆかなくてはならない。

#### 参考文献

- Davies, Eirlys ( 1986 ) *The English Imperative*, Croom Helm, London.
- 出水孝典。( 2001 ) 「until 節内の動詞句のアスペクトと解釈」『英語語法文法研究』第 8 号, 141-155. 英語語法文法学会。東京: 開拓社。
- Farkas, Donka F. ( 1988 ) “On Obligatory Control,” *Linguistics and Philosophy* 11, 27-58.
- Horrocks, Geoffrey and Melita Stavrou ( 2003 ) “Actions and their Results in Greek and English: The Complementarity of Morphologically Encoded ( Viewpoint ) Aspect and Syntactic Resultative Predication,” *Journal of Semantics* 20, 297-327.
- 柏野健次。( 1999 ) 『テンスとアスペクトの語法』開拓社, 東京。
- Lakoff, George ( 1966 ) “Stative Adjectives and Verbs in English,” Report *NSF-17*, Harvard Computation Laboratory.
- Lee, David A. ( 1973 ) “Stative and Case Grammar,” *Foundations of Language* 10, 545-568.
- Ljung, Magnus ( 1975 ) “State Control,” *Lingua* 37, 129-150.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin ( 1998 ) “Building Verb Meanings,” *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*, eds. by Miriam Butt and Wilhelm Geuder, 97-134, CSLI Publications, Stanford, California.
- Roberts, Ian G. ( 1986 ) *The Representation of Implicit and Dethematized Subjects*, Foris Publications, Dordrecht.
- Sag, Ivan A. and Carl Pollard ( 1991 ) “An Integrated Theory of Complement Control,” *Language* 67, 63-113.
- Smith, Carlota S ( 1997 ) *The Parameter of Aspect (Second Edition)* Kluwer Academic Publishers, Dor-

drecht.

内木場努。(1999)「while 節中の動詞句のアスペクトをめぐって 語彙文法的意味論」『英語語法文法研究』第6号, 69-82. 英語語法文法学会。

Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press, Ithaca.

Yagyu Koji (2002) "On Imperatives and Controllability," M. A. Thesis, Ritsumeikan University, Kyoto

#### 用例出典

Chiel, Deborah. *Die Hard with a Vengeance*. New York: St. Martin's Press, 1995.

Queen, Ellery. *The Tragedy of Y*. Tokyo: Kodansha International, 2001.

Tine, Robert. *Eraser*. New York: A Signet Book, 1996.

Tullis, Graham and Tonya Trappe. *New Insights into Business*. (Students' Book) Edinburgh Gate, Harlow: Pearson Education Limited, 2000.

Wallace, Irving. *The Second Lady*. New York: A Signet Book, 1980.